◇

聳え立つ摩天楼が夜を劈き、貪婪の灯が闇を照らす。溢れ出す喧騒は昼夜を問わず大気に満ちて、もはやこの都市に人の目と手の及ばぬ領域はもはや塵一つほどもない。少なくとも、ここに暮らす人々はそう思っている。

二〇五〇年、東京。

情報科学技術の著しい発展はとどまるところを知らず、今や全てのモノはインターネットを介して相互に接続され、あらゆる情報はそれがいかに些細なものであろうと電脳網の白日の下に晒される。

しかし、それはあくまで一般の市民から見た東京の姿に過ぎない。この大都市の影に蠢く企業勢力は今この時も、善良な市民の与り知らぬ闇の中で暗闘を続けている。政治への影響力や経済圏をめぐって人知れず戦いが繰り広げられているのも、間違いなくこの東京の姿の一つだ。

そして、このインターネット全盛の時代にあって、人知れず跋扈する存在がもう一つ。近頃巷に広がる悪鬼悪霊の噂……。今はまだ、ほとんどの人は与太話、ある種のエンターテインメントとして語っているに過ぎない。しかし、彼ら――すなわち、科学の発展に伴い徐々に忘れ去られていった霊的存在――は、確かに実在する。

多くの大企業は既にその存在を確信し、一部ではその『利用』すら始まっているという。電脳の網に捉えられぬ闇で事を成すにあたって、そのような存在は好都合だからだ。

霊的存在が実在しているとなれば、必然、悪鬼悪霊に対する術を持ち、それらへの対処を専門とする裏の稼業も存在する。陽の当たらぬ暗闘の、更なる闇の吹き溜まり。そこに潜み、霊的手段を以て『問題』を解決する者達……。

人呼んで、〝除霊屋（バスターズ）〟。

◇

「ったく、つまんねえなァ……」

アサルトライフルを抱え、気怠(けだる)げに歩きながら男が呟(つぶや)いた。隣で同じようにだらだらと歩く男がそれに応える。

「ま、警備なんて大抵、退屈だろ。むしろ何かある方が嫌だね」

「そうは言ってもよォ、なんだってこんなトコで……」

辺りに響くのは男たちの会話と足音のみ。東京都心では有り得ぬほどの静寂だ。ここは都心に程近い港湾倉庫地帯で、見た目の同じ倉庫がひたすらに立ち並ぶ。倉庫の壁に刻まれた番号以外は全く同じ外観で、それだけなら整然とした区画にも見える。実際は、各倉庫の利用者たる企業間の複雑な関係のためか、その配置や番号の振られ方はいかにも乱雑だった。

「さあな。何か大事なモンを運んでるらしいが……。別の区画担当の奴に聞いた話だと、一番から十番までの倉庫に、そりゃもう厳重な態勢で何かが搬入されたってよ」

「それが何なのか、俺らにゃ知る由もねえし、知ったことでもねえな」

「そう、結局その何かを狙う奴がいないならそれで終わりだ」

「何もねえ倉庫地帯を散歩だけして給料が出るなら、まったく有り難えこった」

彼らのような日雇い警備員に警備対象についての詳細な情報が与えられることは稀(まれ)だ。それでも、警戒対象となる想定脅威についての情報までもが一切ないことは異常と言えた。曰く、警備員以外の者がそもそも立ち入る場所ではないから、とにかく侵入者を見つけ次第報告せよ、とだけ。

「結局いまのところ侵入者なんて来てねえしよ」

「ああ、別の区画でも侵入者がいたなんて話は聞かないな」
「ま、この退屈も明日までの辛抱か……。いっそ、幽霊でも出ねえかな」
もはや雑談ぐらいでしか退屈を紛らわす術がないと判断したのか、男が軽口を叩く。
「はっ、幽霊って……なんだ、お前、そういうの、信じてるクチか？」
「信じてちゃ悪いかよ。いや、まあ、実際別に信じちゃいねえよ？　ただ、こんなだだっ広くて誰もいねえトコなんだ。俺ら警備員以外に出るとしたら、それこそ幽霊だろ」
「そりゃ結局、何にも現れないってこったな」
その時、無造作に並べられたコンテナの奥から物音。金属音だ。
「ん……今、何かしたか？」
「いや、何も。……向こうから聞こえたな」
アサルトライフルをコンテナの方向へ向け、様子を窺(うかが)う。最初の物音以降、他に音はなく、何者かがいる気配も感じられない。
「どうせネズミかなんかだろ」
「ああ、確かに、俺らと幽霊以外にも、それがいたな」
「一応、見てくるわ」
「頼んだ」
一人の男が緊張を解き、ライフルも下ろしてコンテナの方へ向かう。その男の影がコンテナの奥へ消えた次の瞬間、鈍い打擲(ちょうちゃく)音とくぐもった声が響いた。
「……おい、何があった？」

もう一人の男が問いかけるが一切の返事は無い。
「冗談もやり過ぎると面白くねえぞ……」
残された男は警戒しながら、コンテナの奥へ消えた男の後を追い、歩き出す。コンテナ同士の隙間へ顔を向けると、昏倒(こんとう)していると思しき男の姿。
「おい、何が……」
駆け寄ろうとして、男の動きが固まった。背後の温度が急激に低下したかのような錯覚に、思わず背筋が凍る。尋常でない悪寒が男を襲い、反射的に振り返る。
「ヒッ……」
そこに居たのは一人の子供。仮面で顔を覆い、その性別は判然としないが、おそらくは少年。その姿だけ見れば、平均的な成人男性に優(まさ)る体格を持つ男からすれば、全く恐れるような存在ではないはずだった。
男を慄(おのの)かせたのは幽鬼の如(ごと)き少年の佇(たたず)まいと、そこから放たれる、魂まで穿(うが)つかのような悍(おぞ)ましき存在感。何の理屈もなく、ただ直感的に、「この世のものではない」と男は思った。
「ゆ、ゆうれ……」
固まる男に対し、少年は霊とは思わせぬ機敏さで跳躍。身長差を一瞬で詰め寄り、右脚で顔面に飛び蹴りを繰り出す。
「ぐあっ……」
小さく細い少年の肢体からは想像もつかぬほどの衝撃が男の頭部に加えられる。衝撃の瞬間に男の目に映った少年の右脚は、有機的な曲線美を纏(まと)う金属だった。
「……義肢……！」

義肢から呻(うめ)くような音を上げて少年が着地し、脳を揺らされた男はそのまま崩れ落ちた。それを確認して少年は仮面を外す。現れたのは十四、五歳と思しき年相応の顔。しかしその目つきは少年とは思えぬ鋭さを湛(たた)えていた。

「これで安全確保、と。やっと喋(しゃべ)れるな」

少年が初めて言葉を発する。高くも低くもない声色。その呟きに対し、少年の腕に巻かれた通信デバイスから声が返される。

『お疲れ。何人やった？』

ノイズ混じりで抑揚の少ない声はおそらく少女のものだ。

「六人。この辺はちょっと、人が多そうだ。それにしても、なんで俺が幽霊扱いされなきゃいけねえんだか」

『夜闇に紛れて人を襲う、それも善良な市民はおろか犯罪者すら立ち入れない港湾倉庫地帯で、となれば、それは幽霊みたいなものだろう』

通信の声が言うとおり、この港湾倉庫地帯に普通の人間が立ち入ることはできない。ネットワーク的にも隔離されたこの区画は、現代東京における闇の巣窟の一つ。低質ながらも少女との間に通信が成立しているのは、少年がアンテナ代わりとなって半ば無理やりコネクションを通しているためだ。

「それで、次は？」

『待って。今、読んでる』

少年の発する電波が探知され、侵入が露見するおそれは常にある。それでも通信を継続するのはただ会話をするためではなく、少女がこの隔離ネットワーク内の通信を盗聴するためだ。

『待ってもらってる間に、確認。脚は何回使った？』
「ここに突入する一回だけ。あとは、普通の蹴りで十分」
『上出来。あと四回は残ってるね』
ここが煌々(こうこう)とした照明に照らされる舞台上であれば、少年の右脚の義肢から時折漏れ出る暗紫色の煙めいた瘴気(しょうき)に気がつくかもしれない。少年自身は幽霊などではない人間だが、その右脚は特別だった。
そしてそれは、通信デバイスの先にいる少女の右眼も同様。彼女の右眼はネットワークを流れるデータ奔流をただの01列としては認識しない。その眼には、データを作った誰かが、データを作るときに乗せた思念や情念が映る。
『うん、だいたい読めた。目的の倉庫が分かった』
その彼女の右眼にとってみれば、いかに念入りに暗号化され秘匿された通信であろうと、その一部が盗聴できれば十分だ。機械的に生成された暗号鍵は読み取れないので、厳密には暗号を突破できるわけではないが、その暗号文が作られた時の思念が読み解けるなら最早暗号が解けたも同然である。
「どこに行けばいい？」
『倉庫に番号がついてるはず。その番号を……いや、よりによって大字で書かれてるのか。読め……ないね』
「バカで悪かったな。あいにくまともな教育を受けてないんでね」
『画像で送れればいいんだけど、この帯域では難しい。倉庫の位置関係はまだ読み切れてないから、位置情報での指示も難しい』
そう言って少女は口頭での説明を始めた。上にカタカナのムのような形があり（さすがの少年もひらが

なとカタカナは分かる）、その下には右上から左下へ向けての斜線が多くある。二文字目は無視して構わない。次の字の造形はやや複雑で、まず左からキのような形で始まる。次いでその右には……。

「待て、そうまくし立てられても……いや」

『上に四角形が……ん、何かあった？』

「多分それ、俺のちょうど目の前にある倉庫じゃないか」

『なら話が早い。さっそく突撃』

「気軽に言うけどな、中で何が待ってるか……。まあ、行くけどよ」

『よろしい』

少年はコンテナの隙間から出て、目の前の倉庫を見た。前面上部中央に、番号を示す漢字のペイント。その下には前面をほとんど覆うほどの幅をもった鉄のシャッター。当然、シャッターは固く閉ざされており、真っ当な開放手段を持ち合わせている訳でもない。

「さて、裏口でもありゃいいけど……」

『中にはどうせ正社員級の戦力がいる。時間も惜しいし、力づくで』

「そう言うと思ったよ」

呆（あき）れ顔で少年は答えると、屈（かが）み込んで前傾姿勢をとり、目の前の鉄板めがけてロケットスタートを切った。

◇

倉庫内は陰鬱で湿った空気に満ちていた。

そこには錆びて朽ちかけたドラム缶や、元は何であったかすら判然としない鉄屑がいくらか転がっているのみで、まともに倉庫として使われていないことは明らか。

「……む、これは」

壁に身を凭れさせていたスキンヘッドの和装男が顔を上げ、辺りを見回す。

「何か感じられましたか」

その隣でホログラフィックディスプレイを眺めていたスーツ姿の男がスキンヘッド男を見た。

「僅かに。……確証は持てぬ」

「我々は貴方の感覚を買っています。社の脅威になりうることは巨細に関わらずご報告下さい。その後の対応は私が責任を持ちます」

「外。近くで微かに瘴気の感覚があった」

スキンヘッド男は目だけを動かし、自分の感覚の源を探ろうとする。彼は心霊現象の専門家でこそないが、人並み以上の霊感と、霊を操る最低限の術を持つ。元はどこかの寺にいた破戒僧だという。

「ふむ。念の為、〝除霊屋〟に連絡を入れておきましょうか……」

「暫し待たれよ。あれの瘴気と取り違えて、〝除霊屋〟に無駄な報告をしたくはない」

然り。このスキンヘッドの男は除霊屋ではない。こと霊的現象において言えば一騎当千の力と技術を持ち、その多くは自らの肉体にも何らかの『霊障』を有するという人並み外れた存在。〝除霊屋〟と呼ばれるのはそういった化物達だ。

「あれですか。話には聞いていましたが……不気味な」
そう言ってスーツ男が目をやった先には、広々とした倉庫内を音もなく徘徊する鎧武者の姿。奥の壁には意識を失った女性が拘束され、その長い金髪が薄汚い床に散らばっている。鎧武者は女性の周囲を警戒するかのように動く。
ともすれば場違いにも見える鎧武者だが、鎧を纏ってなお一切の音を立てないその異常な存在こそが、この倉庫全体に淀む陰鬱な空気の元凶である。
この鎧武者は生きた人間ではなく、悪霊だ。
「しかし……これは、やはり……外に」
霊感を研ぎ澄ましたスキンヘッド男が呟いた。
「警備員から侵入者の報告はありませんが、霊的存在とすればやはり報告を」
スーツ男が手元の端末を操作しようとしかけた、その時である。
異様な圧力が倉庫内に満ち、鉄のシャッターがある一点を中心にみるみるうちに倉庫内部の方へと歪み始めた。
「なっ……！」
周囲の空気に押し潰されんとするほどの圧力にスーツ男は思わず端末を放り投げ、シャッターを見た。歪みは全くその勢いを減ずることなく広がり、遂に中心の一点から鉄板が裂け、シャッターに大穴が穿たれた。拘束された女性もこの事態に意識を取り戻し、目を白黒させている。
「よし、当たり。……目標も確認」
悠々と大穴から侵入してきたのは、少年だった。少年は拘束された女性を一瞥した後、ぐるりと倉庫全

体を見回して鎧武者と二人の男の存在を認めた。
「何が……何……何者だ」
驚愕に震えた声を出すスーツ男を少年は見据えた。
「お前の方が偉いヤツだな」
言うが早いか、二人の男が怯んでいる隙に少年は一気にスーツ男との距離を詰め、見事な手際で拘束する。ひと目でスーツ男が戦闘能力に乏しいことも見抜いた上での動作だ。
「れ、連絡を！」
拘束されながらスーツ男が叫ぶ。スキンヘッド男は鎧武者を少年へけしかけようとしていたが、声を掛けられて床に放り出された端末へ手を伸ばす。
「何番だ」
「に、二十五番倉庫だ。〝除霊屋〟はそこに」
少年は連絡を妨害せんとするが、鎧武者が緩慢な動きで迫ってきていた。霊体に常識は通用しない。四肢の動きこそ緩慢に見えて、その実鎧武者は恐るべき速度で少年との距離を縮めてきている。
スキンヘッド男はせいぜい下級霊媒師。脅威としては鎧武者が上。そう瞬時に判断した少年は懐に手を入れ……
『〝除霊屋〟同士の戦いになると、厄介。止めるべき』
戦闘態勢をとろうとしたが、少女の通信が割り込んだ。
少年はそれに疑義を差し挟まない。即座に取り出そうとしていた武器を変え、懐から出たその手には小さな標縄。

それを中空に置くように優しく手放すと、標縄はそのまま宙に留まった。
「ガッ……ググ……」
すると、標縄を境に透明な壁が張られたかのように、鎧武者は空気に激突して一時的にその動きを止めた。長くは保たない。が、一瞬でも動きが止まれば十分。少年は弾かれたように跳んで、スキンヘッド男が手にしていた端末を蹴り飛ばす。
「この……若造が……」
スキンヘッド男は敵意に満ちた顔つきで少年を睨め上げ、
「……！」
そして、固まった。睨み返す少年の目つきに気圧され……いや、正確に言えば慄いたからだ。これが少年の……いや、人間のする目なのか？
「ぐぁっ……」
そのスキンヘッド男を一撃で昏倒させると、少年は再び鎧武者へ向き直った。
中空の標縄はもはやそのほとんどが焼け落ち、残された一部も黒煙を上げて今にも失われようとしている。標縄は現世と幽世の境界を示す祭具で、悪霊の通過を阻む結界を作り出す。ただし、これは簡易的なもので一瞬の足止めが精一杯だ。
「あ、あの……！」
声を上げたのは壁際で拘束された女性。
「少し待ってくれ。話はこいつをどうにかしてからだ」
とはいえ、霊媒師を失った悪霊はさほどの脅威ではない。隙を突けば一発で浄化可能であるはず。少年

は再び懐に手を入れ、鎧武者を、そして今にも破られんとする不可視の結界を凝視した。
鎧武者の唸りと結界の軋む音だけが響くこと数秒。
標縄の最後の一欠片が今まさに灰になり、落ちる。
その灰が床へ到達せんとする直前、少年は懐から取り出した小壜を放り投げ、自身はそれより早く駆けて鎧武者の懐へ潜り込んだ。
「ガァッ！」
鎧武者の大振りの一撃で遂に結界が破られる。その時すでに少年は鎧武者の目前で屈み込み、力を溜めていた。
次の瞬間、極限まで縮められていた撥条がその力を解き放つように、少年の右脚が鎧武者を蹴り上げた。
霊的存在とはいえ、こうして現世に顕現して物理的な影響を及ぼしてくる以上、こちらからの物理的干渉も通る。
しかし、霊体に対して物理的なダメージにさほど意味はない。
本命は宙を舞う小壜、その中の塩だ。
仰向けに大きくのけぞった体勢の鎧武者に、小壜から撒かれた塩が降りかかる。
「ググ……ガガガッ……」
塩をその身に受けた鎧武者は全身を錆びつかせたように動きを止め、小刻みに震え出す。暫くの間呻きながら震えていたが、徐々にその声は小さく、存在感は希薄になり、ものの十数秒で跡形もなく鎧武者は消え去った。
「よし」

その消失を最後まで確認してから少年は緊張を解いた。
「その……」
「ああ、待たせたな。あんたを助けに来た。……といっても、そういう依頼を受けただけだ。依頼主は、詳しくは分からねえが、あんたの会社の奴だろ、多分」
改めて声をかけてきた女性に、少年は落ちた小壜を拾いながら答えた。
「そう……なのですね。その、今、それは……塩で？」
「ん？　そうだ。気になるか？」
よく『清めの塩』とは言うが、塩それ自体に霊を祓うような力があるわけではない。むしろ塩という媒体は本質ではなく、「なんだか霊を祓えそう」「清らかな気がする」といった人々の思念……ある種の思い込みが塩という物体に集中することで、霊を祓う力が結実する。
そういった特殊な力を持つ神祭具や魔除けや護符などのアイテムを如何に選別、収集、時には創造し、適切に運用するか。それが〝除霊屋〟に求められる資質である。
清めの塩もただの塩も物質的には同一で区別はつかない……通常であれば。その点、少年の相棒たる少女の持つ魔眼は、人の目には視えぬ思念や情念を映し出す。この二人が若年ながら一廉の〝除霊屋〟として活動できる所以の一端である。
『その話もいいけど、まずこの先のこと、いい？』
少女が再び通信を入れる。無事に突入と目標の保護が成功したとはいえ、未だ敵地の只中にある。外部への連絡は断てたものの、いつ新手が現れるか分からない。
「っと、そうだな。脱出か？」

『待って。さっきから盗聴した付近の通信を読んでる』
「何かあったか」
『場合によっては、まっすぐ脱出とはいかないかも』
「少々、よろしいですか」
二人の通信を遮ったのは捕らえられていた女性だ。改めてよく見れば、年の頃は少年より僅かに上の十六、七程度といったところか。長い金髪に、落ち着いた雰囲気と丁寧な口調も相まって、いくぶん大人びた空気を纏(まと)っている。
「ん？」
「お二人は……〝除霊屋(バスターズ)〟、それも【幽谷兄妹(かくりだに)】とお見受けします」
「それは……」
少年は驚愕(きょうがく)した。先程から、目の前の鎧武(よろい)者に対する怯(おび)えのなさに只者(ただもの)ではないとは思っていたが、闇の中の闇で活動する〝除霊屋(バスターズ)〟の事を……それだけでなく、二人の屋号までをぴたりと言い当てるとは。
「……だとしたら、何だ」
「お二人に、今回の件でお話したいことが」
「大企業の令嬢ともなりゃ、そこまで詳しいモンなのか？」
「いえ、そういう訳では……私は少し、特殊でして」
捕らえられていた女性、即ち今回の二人の救出対象である複合企業体『晨明(しんめい)グループ』の会長令嬢はそう言うと、おもむろに後ろを向いて髪をかき上げた。
「『霊障』……！」

その首の後ろには、深い紅色をした拳大の結晶が埋め込まれている。実際には埋め込まれているのではなく、脊髄から直接生えているという。

「こういう身ですから、色々と」

「なるほど……？」

人の思念の集積が、独立した霊的存在となって現世に物理的影響を齎(もたら)す。それが、人体に影響を与えるような形で発現したものが『霊障』だ。『霊障』はただの異形であるだけでなく、何かしらの力を秘めている。少年の義肢に隠された右脚も、少女の右眼もその一つである。

『それで、その霊障は何ができる？』

「一言で申し上げれば……思念の結晶化です。本来、霊的なアイテムは物理的な実体に対して思念を結実させることで生み出されますが……私は、純粋な思念を直接、物質化することが出来るのです」

「そいつは……また大層な『霊障』だな」

だが、まだ話が見えてこない。この結晶が極めて強力な力を持つ『霊障』であることは分かった。それが今この状況とどう関係する？

『分かった。どこかの倉庫に運び込まれた「大事なもの」というのが、その晨明(しんめい)の令嬢の力で造られた結晶ってこと』

周辺の通信を盗聴している少女が一足先の情報を元に判断する。

「その通りです。私の力を悪用され……おそらくは何か悍(おぞ)ましい破壊の思念を結晶化したものが、この辺りに保管されているはずです」

「要は、この倉庫群のどっかに、とんでもねえ爆弾が運び込まれてるって？」

少年はなんとか話についていこうとする。そういえば、この倉庫に突撃する前に眠らせた警備員の誰かが、そんな話をしていた気もする。

『その脅威は、取り除かないとまずいだろうね』

「はい。そして、それは私にしか出来ないことなのです。ですから、こうして今お話を」

『造られた結晶を無力化する手段があると』

「その通りです。思念の集積たる結晶同士を近づけることは危険ですから、ただ回収すればいいわけではありません。いちど私の身を離れた結晶でも、再び十分近くに寄ることができれば、そこに込められた思念を無力化することが可能です」

「……つまり、あんたを連れてその結晶のところを回ってやればいいんだな？」

『だいたい把握。それで行く』

◇

三人はいま一度簡単に情報を整理すると、具体的な行動の立案に入った。

『その倉庫の床のどこかに、開く蓋があるはず。ある？』

「どれ……そうだな……あれか？」

少年は少女の言う蓋を探し、倉庫の隅でそれを見つけだした。閂を外し、赤く錆(さ)びた蓋を何とかずらすと、地下の闇へ伸びる階段が顕(あらわ)になる。

「階段……地下だと？」

『何のためにあるかは不明。情報は持ってたけど、倉庫内からしか入れないから今まで気にしてなかった。地下から倉庫に近づくとして、結晶との距離は十分？』

「そうですね……おそらく。ここから見る限り、さほど深くはありません。結晶のある倉庫の地下へ到れれば、思念の操作自体は一瞬で可能です」

とはいえ、地下に広がる謎の回廊はとうの昔に遺棄されたものと見え、当然ながら照明の一つもない。回廊の広がり方も分からない状態で、手元にある簡易照明だけではどうしても心許ない。

『その港湾倉庫地帯は埋立地。当時の施工図を読んできた。どの番号の倉庫どうしが地下で繋がってるか、完全に分かる』

少年のその心配を予測したかのように、少女が事も無げに言う。

「やはり……凄腕(すごうで)なのですね。若くして異様な存在感を発揮されていると聞いてはおりましたが、実際に目にすると……」

「そう、こいつはな、凄(すげ)えんだ」

「そう仰るあなたも、あの戦闘の手際……それに」
視線の先には歪(ゆが)んで大穴を開けた鉄のシャッター。
「あれは……まあ、どうせ使うモンだから隠してもしょうがねえ。俺の右脚も『霊障』があってな。日に何回かああいうことが出来る」
恐らくこの後、迅速な行動のために右脚の力を使うことになるだろう。回数制限付きなのが面倒なところだが、脚を自在に強化できるのは小回りが利いて便利な能力ではある。
「ただ、こいつが凄(すげ)えのはな、『霊障』のそれだけじゃねえんだ」
少年は腕のデバイスに目を落として言った。デバイスから声が返る。
『そう褒めるな。ところで、その脚を使うと、どれぐらいの速さが出る？』
「地下道は倉庫のある地点以外、直線だな？　なら、隣り合う倉庫までの移動で一回。お嬢さんを抱えながらってことを考えりゃ、まあ、四倍速がいいとこだな」
『了解。条件を纏(まと)めよう』
達成すべき目標は、この倉庫群にある全ての結晶を無力化すること。それも出来るだけ短時間で。そのために必要に応じて右脚を使うが、最終的な脱出のために回数を一回は残しておくこと。また、〝除霊屋(バスターズ)〟相手に不用意に接近するとこちらの行動に勘付かれる恐れがあるため、〝除霊屋(バスターズ)〟のいる倉庫には近寄らないこと。
『これでいいね？』
「ああ」
「ええ、分かりました……けれど、その、どのように行動すれば？　妹さんがその都度指示を下さるの

ですか？」
本来であれば、起こりうるイレギュラーに対応するためそのような体制を取るほうがよい。しかし、もともとインターネットと隔離された地帯に無理やり通信を通している状態だ。地下での移動となると通信を続けられる可能性は低い。
『今からそっちに、完全に最適なルートを送る。それに従って行動して』
「最適な……？　そのようなことが可能なのですか？」
一度だけルート情報が送られて、地下に入って以降は通信が無くなるという旨の言葉を受けて、不安を隠せない声で問い返す。
『可能。それを計算するプログラムを一から、すぐに作り上げる』
常に変わらず、抑揚の少ない声で言ってのける少女。
「な？　だから言っただろ？　こいつは凄（すげ）えんだって」